

雑文集

蘭越の自然とかかわって



大表 章二著

はじめに

蘭越に住み始めてから 10 年余りになりました。この間、蘭越自然探検隊の仲間とともに、あるいは個人として、自然観察や生きもの調査、自然保護の活動を行ってきました。またこうした実践についての文章を書いてブログなどに載せてきました。

今回「らんこし作家デビュー・プロジェクト～本出版でまちおこし～」第 2 弾の取り組みが行われると聞き、何か書こうと思ったのですが、締め切りが 10 月末でまとまった執筆時間もとれないことから、これまで書いてきたものから選択することにしました。

今読み返してみると恥ずかしくなるような文が多いのですが、ほぼそのまま載せてあります。雑多な短文の寄せ集めですが、目次を見て興味を持てたものだけでも読んでいただければ嬉しく思います。

大表 章二

2014 年 9 月 25 日

目 次

ニホンザリガニ 自然学ぶ契機に	3
水辺の楽校はこのままでいいのか	3
蘭越におけるニホンザリガニ生息調査	5
せせらぎまつりで気になること	6
サケの遡上観察会実施報告	7
人工河川の末路 ～北海道開発局の水辺の楽校～	9
名駒の水辺の楽校はなぜ国土交通省のいう水辺の楽校のあり方 とかけ離れているのか？ 一桜井善雄著「水辺の環境学④」を読 んで一	10
雪中植林に対する意見	12
二つの情報館について思うこと 道路情報館と川の情報館 ..	16
タンチョウが蘭越にやってきた	17
ヘイケボタルを増やす活動に対する提案	20
ショウジョウトンボを蘭越町名駒で見つけた	22
町内3箇所ではニホンザリガニが絶滅？ 道路工事が影響？ ..	24
クマガラの森を守ろう 一道道の工事にあたって一	27
モニタリングサイト1000 里地調査一般サイト名駒地区 2009年 前期の調査を終えて	28
道は自然環境保全・生物多様性保全のためにもっと力を入れてく ださい	30
住民による自然再生の取り組みと蘭越町の環境行政について	31
蘭越町のトンボ類	33
昆虫博士養成講座（初級）	38

ニホンザリガニ 自然学ぶ契機に

この春、町内の皆さんに、希少な在来種ニホンザリガニの生息調査を呼び掛けたところ、二歳から大人まで三十五人もの人たちが集まってくれました。そこで「ニホンザリガニ探検隊」をつくり、七月から十月まで、町内各地で調査を行い、十カ所で四百匹の生息を確認しました。

素人ばかりの探検隊で、ない知恵を出し合いながらの調査になりましたが、身近な自然にみんなで親しむことができました。参加者の感想を集めた「探検隊ニュース」も発行しました。

子どもからは「こわかったけど、ザリガニにさわれた」「オスとメスの区別ができた」「来年は今年よりもっとたくさん見つけたい」大人からは「子どもより夢中になった」「地球環境を考えていく第一歩になる」などの声が寄せられました。

きれいな水と豊かな森がなくては生きていけないニホンザリガニ。今、道内各地で激減しているそうです。これからも町内のみなさんと一緒に、ニホンザリガニを通して自然の大切さを学んでいきたいと思っています。

(2004年11月23日 北海道新聞読者の声に投稿)

水辺の楽校はこのままでいいのか

後志管内を流れる尻別川とその支流である目名川の合流点付近に、北海道開発局によって整備された水辺の楽校がありま

す。これは「身近にある川を子供たちの遊び場とし、自然体験を楽しめる場として活用するプロジェクトです」（北海道開発局による）。私は、数年前から自然観察のためにこの付近を頻繁に訪れています。河畔林や草原、そして水辺があって様々な生物が見られるからです。

ところで、この場所に来るたびに、気になることがあります。それは、水辺の楽校が荒れ放題だということです。水がほとんど流れておらず、藻類が繁茂しているところや干上がってしまったところなどがみられるのです。また利用者がほとんどいなくて、たまに釣り人や犬の散歩に来る人を見かける程度です。さらに子どもたちが水辺に親しめるようなつくりになっていないことも疑問でした。

このような現状のままではよくないと思い、開発局小樽開発建設部蘭越河川事業所に出向いていくつか質問を行いました。

どうして水が流れていないのかを聞いたところ、土砂が入って目詰まりを起こしたり、河床が低下したりして水が入らなくなったそうです。取水口を上流に移して改善をはかったが、また入らなくなったとのことでした。

どの程度利用者があるかについても聞きました。答えは、クリーン作戦の場となっている。児童や生徒が水生生物や水質調査をしている。フットパスとしても利用されている。しかし名駒小学校の子どもたちに日々利用してもらおうと思っていたが、廃校になってしまい、これはできなくなった、というものでした。

なぜ子どもたちが親しめるようなつくりになっていないの

かを聞いた答えは、「子どもや老人が水辺にいけるように緩傾斜通路にしている」でした。

開発局の回答は、自らの言う「子どもたちの遊びの場」「自然体験を楽しめる場」からは程遠いものがあると思います。こういう態度を変えさせていくためには、私一人の力ではどうにもなりません。やはり地域の住民世論の高まりがなければ無理でしょう。でもやはり、誰かが声を出し続けていくことが必要でしょうし、その役目を自分が担わなければならないと思っています。

(2006年7月 北海道自然保護協会会報 NO. 130)

蘭越におけるニホンザリガニ生息調査

2004年にニホンザリガニの生息調査を町民の皆さんに呼びかけたところ、幼児から大人まで35名もの方が集まりました。そこで「蘭越ニホンザリガニ探検隊」という組織を作って活動しました。町民から寄せられた情報や地図をもとに、生息していそうな場所に出かけ、15分間に見つけたニホンザリガニについて雌雄の別や体長、体重、周辺環境などを記録しました。その結果7月から10月までに27箇所中10箇所で400尾の生息を確認しました。

翌年からは私個人が調査を続けています。調査内容も生息数のみに限定して、細く長く続けようと思っています。なお「蘭越ニホンザリガニ探検隊」は「蘭越自然探検隊」と改称し、活

発に活動を続けています。

3年間の短い調査でも、減少の一途をたどっていることがうかがえます。調査した54箇所中生息を確認できたのは17箇所だけです。一見生息適地と思われても、生息を確認できないところが数多くありました。違いは湧水の有無です。生息地には湧水がありました。湧水があっても見られないことはありますが、湧水が無い場所では、必ずといっていいほどみつきりません。湧水が流れ出すとすぐに農薬などの汚染物質が混入し、生息に不適な水になってしまうことが考えられます。

ニホンザリガニは北海道と北東北にしか生息しない種で絶滅が危惧されています。今後生息環境を破壊する公共工事をさせないなど、少しでもニホンザリガニの保全のために役立てていきたいと考えています。

(2007年4月 北海道自然保護協会会報 NO. 133)

せせらぎまつりで気になること

きのう蘭越のランラン公園で「尻別川せせらぎまつり」がありました。様々な催しが繰り広げられて、多くの人々でにぎわっていました。今年で12回目になるそうで、地域の行事としてすっかり定着しているようです。

さて私はここ数回参加しているのですが、気になっている点があります。

一つは「魚と遊ぼうつかみどり」という催しがあることです。

人工池に放たれたニジマスを子どもたちが追いかけては捕らえるのです。捕まえた数だけもらえるようです。「魚と遊ぼう」といっても魚にとっては遊ぶどころか至極迷惑な行為でしょう。

昨年のことを思い出しました。ある子どもが10尾以上捕まえたのですが、その親が家に持ち帰ることを拒否したので、魚をすべて尻別川に放したのです。放したというよりも、捨てたと言ったほうがいいでしょう。ビニール袋の中ですでに息も絶え絶えになっており、腹を浮かせて流れていったのですから。遊びのために命を無駄にしてしまったのです。

食べるためには命を犠牲にしなくてはなりません、その際もできるだけ苦痛を与えないようにすべきでしょう。つかみどりは魚にとって苦痛そのものではないでしょうか。

二つ目は、無料で物がもらえることです。チラシには「お楽しみ抽選券」が付いていて、当選すると何かもらえるそうです。またアンケートに回答すると、景品がもらえます。さらに「川の楽校」（魚のつかみどりもその一つ）や「熱気球試乗体験コーナー」にも無料で参加できるのです。このような、物で人を集めるようなやり方に疑問が残ります。

(2007年7月30日)

サケの遡上観察会実施報告

6日、名駒の尻別川と目名川合流点でサケの遡上の観察会が

行われました。北海道自然観察協議会と蘭越自然探検隊の共催です。

好天のもと10時半に駐車場に集まった47名の参加者はまず捕獲場を見学しました。オスとメスに分ける作業を見学時間に合わせていただくことができたので、リアルなサケの姿を観察することができました。

その後、歩いて合流点付近まで行き観察しました。例年に比べてサケの遡上が少なかったのですが、それでも時々避けの跳ねる姿や音に参加者は目を奪われていました。水量が少なかったので水の中に入って観察することもできました。しかし川岸近くの浅瀬で遡上する姿はなく、生き生きとしたサケの姿を間近に見ることはあまりできませんでした。でも小石についたトビケラの幼虫やヨコエビも観察でき、子どもたちは熱心に探していました。またウグイやアユの大群も見られ、サケだけではなく水生生物の多様な姿も垣間見ることができました。

地元蘭越28名、小樽10名、ニセコ5名、札幌1名、余市1名、兵庫県2名と各地から参加者がいました。また子どもが18名（中学生3名、小学生12名、幼児3名）参加して、元気のある観察会になりました。

反省点としては、予想よりも参加者が多くて、観察会としてのまとまりに欠けたところがあったこと、駐車場のトイレが閉まっていた、使用できなかったこと、バスの配車ができなかったこと（代替りの車は確保できた）、などがあげられます。

以下に参加者から寄せられた感想です。

- ・2年生の国語でサケの学習がある。その事前学習として役

に立った（地元の小学校の先生）

- ・サケが勢いよく跳ねているところが見られて良かった（札幌からの参加者）
- ・サケは少なくとも広い川原でのびのびできた
- ・すごく好奇心の強い子がいた
- ・サケが少ない年があるのも自然の姿であり、それを知ったことも意義があることだ
- ・サケのオスとメスがわかった。いろいろなものを見た。エビを捕まえた。すごく小さくてピッピッと速かった。（5才の男児）
- ・去年よりもサケの勢い良く上る姿が見られなかった。少し物足りなかった。（蘭越の参加者）
- ・こんなにサケも水量も少なくてショックだった。環境の変化に直面した。中州には草が茂って景観が変わってしまった。温暖化の影響かもしれない。環境の勉強会をしなければいけないと思った。子どもたちの参加は多かったが、自然への働きかけが少なかった。
- ・観察の場所是对岸のほうが良かったのではないか？ エビがいたので子どもたちの興味をそそった。天気が良く楽しかった。娘はグミの実をたくさん採った。自分で煮て、ざるで濾して食べていた。えぐみが消えておいしかったようだ。川に入らずぶぬれになりそれが楽しかったようだ。

（2007年10月8日）

人工河川の末路 ～北海道開発局の水辺の楽校～

一昨年(2007)の6月に北海道自然保護協会の会報に「水辺の楽校はこのままでいいのか」という小文を投稿し、蘭越町名駒にある水辺の楽校が荒れ放題になっていること、子どもたちが親しめるようなつくりになっていないことに言及しました。

私の拙文を読まれた蘭越町長からの指摘もあって、北海道開発局はこの春水が流れるように取水口を改修しました。たしかにそれ以前に比べてよどみなく流れるようになりました。しかしそれは一時的なものに終わり、しばらくするとまた以前のような状態に戻ってしまいました。

「自然体験を楽しめる場」(北海道開発局)といっても、自然体験に適したように造られていませんし、自然体験をする人もほとんどいません。しょせんは人工水路です。何度改修しても元の木阿弥でしょう。

それならいっそのこと、このまま放置しておいたほうがよいのではないかと思います。北海道開発局が壊した自然が、どのように再生していくかを観察する場にしてはどうでしょう。

しかしなんというお金の無駄遣いでしょう。そんなお金があるなら、ほんとうに自然保護に役立つように使ってほしいものだと思います。

(2008年1月 北海道自然保護協会会報 NO.136)

名駒の水辺の楽校はなぜ国土交通省のいう水辺の楽校のあり

方とかけ離れているのか？ —桜井善雄著「水辺の環境学④」を讀んで—

4冊からなる「水辺の環境学」の③と④をほぼ読み終えました。そのうち①と②も読むつもりでいます。全体を通して参考になりましたが、いくつかの項は特に興味深く読みました。水辺の楽校について論じた部分もそのひとつです。

水辺の楽校のあり方について書かれているところを私なりにまとめて紹介すると、

- ① 川（特に流路）は、その場所に昔から流れていた姿が基本である。人の手で自然らしく作ることは戒められる。
- ② 一部には、人間がアクセスできない（あるいはさせない）場所も必要である。危険防止と生物の保護の2つの意味で。
- ③ 川本来の多様な動植物の復活を目指すことが大切で、河畔林の役割を忘れてはならない。
- ④ 流れの一部を囲んでその中に養殖した魚を放し、子どもたちにつかみ取りをさせるなどは、生きものとのふれあいについての大きな誤解である。
- ⑤ その土地、その川がもつ歴史と文化（古くからあった行事や季節的な景観）を大切にする。
- ⑥ 人工物に頼らない水辺での遊びや憩いを中心とする。川岸に沿ってゆっくり歩くことができる歩道があり、そのあちこちに、水辺へのアクセスや川の中に入って安全に遊べる場所、木陰などのあることが大切である。

以上のようになります。

ところで、著者によれば、これらは著者の私見を加えつつも、国土交通省が設けた懇談会の中でのあり方なのです。

次に、蘭越町名駒に作られた水辺の楽校について、上記の項目と対応させてみたいと思います。

名駒の水辺の楽校は

- ① 昔から流れていたとはいえない川で、人の手で作られた川です。そんなに自然らしくもありませんが。
- ② アクセスできない（させない）場所はありません。生物保護の必要性もないと考えられるので、その意味では当然でしょう。
- ③ 復活を目指すどころか、どのような生物相であるか、調べられてもいません。
- ④ この場では、このようなことはなされていませんが、ランラン公園での「尻別川せせらぎ祭り」（北海道開発局後援）では恒例になっています。
- ⑤ この部分については、現在のところ私には言及できません。
- ⑥ 子どもたちが安全に水に触れて遊んだり、自然を観察できる場所はありません。人工河川であるにもかかわらず、そのようなつくりになってはいないのです。

こうしてみると、名駒の水辺の楽校は、国土交通省の懇談会が考えるあり方とは大きく食い違っているといわざるを得ません。北海道開発局も国土交通省の1組織のはずなのに、どのような過程を経て変質してしまったのでしょうか。

(2008年2月16日)

雪中植林に対する意見

NPO 法人しりべつリバーネット（以下リバーネット）は、いろいろな行事を尻別川流域で行っており、雪中植林もそのひとつです。この法人の行う行事の特徴は、北海道開発局との役務契約による金銭が使われていることです。私がリバーネット主催の行事に強い関心を持つのは、公金が出ていることによります。

私は 2005 年から北海道開発局小樽開発建設部やリバーネットに対して、役務契約についての質問を繰り返して行い、回答を得てきました。また今回雪中植林に参加しました。こうした活動を通して持った雪中植林に対する意見を少し書こうと思います。

まず、“植林”と称していますが、地道な植林活動というより派手で壮大な植樹イベントというのが実態だと思います。昨年度まで 7 年かけて植えた本数は合計するとわずか 350 本（中心木）です。7 年間の参加者数が何人かはわかりませんが、ここ数年の参加者数は毎年約 300 名といますから、合計人数は 1000 人を大幅に超えているのは間違いないでしょう。少なく見積もって 1000 人として計算してみると、一人当たり 0.35 本にしかなりません。もちろん参加者が植えたヤナギは中心木を守る役目があり、それを植えることも大きな意味を持つことを

否定しません。

また植林地の名駒では、苗が帯状に植えられていて面をなしていません。今後ここを森林にするという計画はないと思われます。

しかし私は今求められているのは、植樹イベントではなくて植林活動だと思います。森林づくりだと思います。地球温暖化をはじめ明白になった地球環境の悪化を食い止めるためにはさまざまな取り組みが必要ですが、森林をこれ以上減らさず、増やしていくことも大事な活動であるからです。

リバーネット理事長の牧野さんから「雪中植林は環境教育として実施している」とうかがいました。

で次に環境教育としての雪中植林を考えてみます。

初めて参加する人にとっては、意義のある活動であると思います。しかし毎年参加している人にとってはどうでしょうか。カミネッコンを組み立ててポットを作る、培養土を入れる、ヤナギを挿し木する、現地に運ぶ、中心木の周りにヤナギを挿したポットを置く、雪をかける、という同じ活動の繰り返しでは、興味・関心も薄れてくるでしょう。ただ植えるだけでなく、樹木が成長し、長い時間をかけて森がつくられていく過程を学ぶことこそ、意義のある環境教育になるのではないのでしょうか。その点からいえば、夏に成長を確認するための観察会を企画したり、クリーン作戦の際に行っているという補植を別にきちんと位置づけて実施したりすることもあっていいのではないかと思います。そういえば現地で、蘭越小学校の先生が児童に対して「夏になったら、見にこよう」といっているのが耳に入り

ましたが、大事なことだと思いました。

それから植樹に必要な用具や下準備などのほとんどを主催者によって準備されていて、その結果参加者の活動が限定されているというのも、環境教育の観点からみて疑問です。先ほど述べたようなシステム化された一連の作業の中で、考えたり、工夫したり、協力したりという多様な活動が生み出されていない気がするのです。

また、参加者の年齢が多岐にわたっているにもかかわらず、同一の活動内容であることも疑問です。寒い中の活動ですから、高齢者や幼児などの活動時間は短くするなどの配慮は必要ですが、高校生などの若い人は雪を取り除く作業なども経験するようにするなど、参加者の年齢に合わせた活動があってもいいのではないのでしょうか。

気になったのは、食事のあと、山のようになったスチロール容器やペットボトルです。昼食は主催者が提供するにしても（私は参加者が持参すべきだと思いますが）、食器や箸やお茶などは参加者が持参するべきでしょう。ポット苗を持ち運ぶための袋も各自持参するようにすれば、無駄を減らせます。

以上の点からみて、雪中植林は環境教育の視点においても、改善すべき点が多々あると思います。

次は費用の額です。雪中植林にかかった費用が多すぎるのではないかということです。昨年の役務契約費は 189 万円です。この金額ですべての費用を賄ったとすると、参加者が 300 人ですから、一人当たり 6,300 円になります。またこの年植えた中心木は 60 本だから 1 本あたり 31,500 円です。これは単純計算

ですが、一応の目安にはなるのではないのでしょうか。それにしても私の目から見ればお金のかけすぎに思えます。

環境教育としての考え方からすれば、その成果というものは目に見えてわかるものではなく、お金の換算できない部分があります。単純計算だけで、かけた費用に対して成果が小さいとは一概にいえません、それでもやはり気になるところです。使途だけでなくその金額も知りたくなります。

以上私なりに雪中植林に対する意見を書きましたが、ご意見、ご批判などありましたら、ぜひお寄せください。

(2008年2月26日)

二つの情報館について思うこと ～道路情報館と川の情報館～

22日付の北海道新聞は、札幌南区の「道路情報館」と白糠町の「M7.8 パネル館」が休館になっていることを報じています。これらの施設の建造費の一部に道路特定財源が充てられており、同財源が道路整備以外に無駄遣いされているとの批判を受け、国土交通省が使い道の総点検を求めたため、開発局は廃止も選択肢にいれているそうです。

これまで私は札幌に車で行くとき、通り道にある「道路情報館」に時々立ち寄っていました。トイレの使用とどれだけの人が利用しているかをチェックするためです。開発局らしく外観はとても立派な施設です。中に入るたびに思ったことは、図書コーナーは無駄だということ。私の見る限りにおいては、誰も利用者はいませんでした。またゲームみたいなものもありまし

たが、これも無用の長物です。トイレと道路情報の提供だけなら、面積においても容積においても、半分以下で、いやそれ以下で十分事足りると思われま

す。仮に廃止したら、あの建物はどうするのでしょうか？出来てから何年たつのか覚えていませんが、まだ相当に新しいはずで

す。壊すにしても他に転用するにしても、なんという無駄遣いでしょうか。道路特定財源が使われていようがまいが、このような施設をつくったことが信じられません。

蘭越に「道路情報館」と似たような名前の「川の情報館」があります。これも北海道開発局が作った施設で、平成 16 年から NPO 法人しりべつリバーネットに管理を委託しています。開発局はこの法人と役務契約を結んでおり、その金額は、16 年度と 17 年度には年間約 200 万円、18 年度には 500 万円余、19 年度には 735 万円（これには雪中植林も含んでいる）となっています。

この施設にも私はときどき訪れています。いつも中はがらんとして

います。尻別川やそこに棲む生き物の写真が壁に飾られ、開発局が作ったパンフレット類が展示されています。

- 「川の情報館」のホームページでは、
- 1：「清流」尻別川の情報発信基地
 - 2：地域交流や学習の場の提供
 - 3：水防拠点

と位置づけています。

しかし私はこの情報館は本当に必要なものなのかいつも疑問に感じていました。

今回「道路情報館」休館の記事を読んで、「川の情報館」について少し調べてみようという気になりました。

※「東京みちの情報館」など、全国各地の類似施設が閉鎖していることが報道されていますね。

(2008年3月23日)

タンチョウが蘭越にやってきた

5日の昼過ぎ、町内の三和に住む前田敬子さんが、散歩途中に1羽のタンチョウが自宅付近の水田で餌をついばんでいるのを発見して、私に連絡してくれました。すぐに車を走らせて現地に向かいました。雪が融けたばかりの褐色の水田に白いタンチョウはよく目立ち、すぐに見つけることができました。成鳥ではなくて若い個体ようです。ちょっと撮影してから前田さんと話をしているうちに見失い、あわててさがして再び撮影に没頭。タンチョウは私の存在をまったく気にせず、水田を歩き回りながら熱心に餌を食べていました。またときどき入念に羽づくろいをしていました。ときどき薄日は射すもののほとんど雲に覆われているお日様が顔を出すのを待ちましたが、2時間ほどたつと寒くなって切り上げました。

蘭越でタンチョウを見るのは初めてでした。絶滅が心配されているタンチョウも、関係者の努力で少しずつ増えてきて、生息範囲も広がってきているそうですが、まさかこの蘭越に来る

とは思っていかったので、驚きと喜びでいっぱいです。連絡してくれた前田さんに深く感謝しています。

これは大ニュースだと思い、前田さんの同意を得て北海道新聞社に伝えたところ、8日の小樽・後志版に「餌求め？タンチョウ蘭越に」という見出しで記事が掲載されました。

その夜、釧路市立博物館の松本文雄さんから連絡が入りました。釧路市立阿寒国際ツルセンターでは国内のタンチョウの出現情報を収集しており、今回の蘭越での情報をデータベースに加えたいとのお話でした。新聞記事やブログに書いた内容のほか、目撃地点を詳しく記した地図、タンチョウの右側、あるいは背中が大きく写った写真、また水田でなにを食べていたかなどの周辺環境や行動などの情報を要望されました。

地図と写真はすぐに提供できました。餌については撮影のたびに見ているのですがよくわかりません。植物性のもののような気はします。タンチョウの右側や背中の写真が必要なのは、3月18日から4月1日まで石狩市浜益で見られた個体と同一のものかを確認するためでした。

その後タンチョウは、9日午前まで町内の三和や名駒で確認できました。ところが9日の午後から消息が不明になり、11日の午前中まで探しましたが、見つけることができませんでした。町内の別のところに移動したか、もっと遠くまで行ってしまったのかもしれない。

前田さんは、水田の作業に人が入るようになり、また乾燥化も進んで餌が採りにくくなり、まだ雪の残っているニセコや倶知安方面の田んぼ、あるいは酪農地帯に行ったのではと推測さ

れていました。

新聞記事を読まれた2人の方から電話がありました。どちらの方もタンチョウを見たいので、場所を教えてほしいというものでした。自然情報はやみくもに教えたと、自然破壊につながりかねないので、慎重を期すことが求められます。今回の場合はその恐れがないと判断し情報を提供しました。ただ時すでに遅しと思われます。

10日に釧路市立博物館の松本さんから、石狩市浜益で見られたタンチョウと蘭越のタンチョウは同一のものであるとの連絡をいただきました。長年タンチョウの研究をしておられる正富宏之先生が写真を見て判定されたそうです。松本さんは、タンチョウは現在1200羽ほどに増えて繁殖地が不足し、釧路周辺でも狭い川や農家の近くなどで営巣するものが増えていく。いずれ道央方面でも営巣するつがいが出てくるのではないかと語っています。

広い範囲に出現するようになったタンチョウがどのように移動しているのかは未解明の部分が多いと思われます。多くの目があればその足取りや生活の様子を詳細につかむことが可能になるのではないのでしょうか。後志支庁や町が有線放送などの手段を使って、住民にタンチョウ目撃情報の提供をお願いするようなことをすればいいのではないかと考えました。情報収集の手段であるとともに、自然に対する住民啓発としての意義も併せ持つと思います。そして今後のタンチョウの保全に役立つでしょう。

今回、前田敬子さんとともにタンチョウの目撃情報を調査・

研究機関に提供し、協力できたことをうれしく思います。

(2008年4月12日)

ヘイケボタルを増やす活動に対する提案

蘭越町三和のほたるの里の会では、10年前から吉国自然公園においてヘイケボタルの増殖活動が続けているそうです。私は、ホタルに親しみ、ホタルを増やす活動に対して共感を覚えるものですが、その方法について改善したほうが良いと思われる点がありますので、それについて述べます。

まず、本州から購入することはやめて、地域のヘイケボタルを増やす取り組みをしてはどうでしょうか。

今外来生物の移入が北海道でも大きな問題になっています。たとえばアライグマやウチダザリガニ、セイヨウオオマルハナバチなどが生息分布を広げ、在来の生物や水産物、農作物などへの被害がでています。調査や防除の活動も行なわれていますが効果をあげるのは容易なことではありません。

このヘイケボタルの場合、同じ種の国内での移動ではありますが、これも大きな問題をはらんでいます。少なくなったとはいえ蘭越にはヘイケボタルが生息しています。同種であっても蘭越と本州では異なった特徴を持っています。移動能力に乏しいホタルは地域ごとに様々な分化をとげていると思われます。長い年月を経て獲得された遺伝的な多様性が交雑によって失われる危険があるのです。

また幼虫のえさとしてカワニナを購入して与えているのですが、これもやめるべきだと思います。ホタルの場合と同様な問題が考えられます。このあたりのヘイケボタルが自然状態で食べている貝の種類を調べ、そこに生息する貝の増殖をはかるべきだと思います。

吉国自然公園には2本の小川が流れていますが、どちらも人工的な施しがされており、流速もかなりあり、ヘイケボタルの生息に適しているとは思えません。またそのほかに、流れが緩やかな湿地状のところもあって、この部分ならば一見生息可能のようにみえます。

いずれにしても現在でも細々と生きながらえているのですから、まず生息場所、生息数、生態（交尾や産卵の場所、幼虫の食べ物や生育過程など）を調べ、どのような周辺環境がヘイケボタルの生息にふさわしいのかを明らかにして、そのような場所を増やしていくことが大切だと思います。

(2008年5月27日)

ショウジョウトンボを蘭越町名駒で見つけた

7月31日夕方、見慣れない真っ赤なトンボが、池の中央付近に伸びている植物の茎にとまっていた。大きさはシオカラトンボと同じくらいだ。とにかく写真を撮らねばと静かに近づいて、上から何枚か撮影した。横からも撮りたいと思ったが、泥の中の足は思うように動かない。トンボは不穏な気配を感じた

ようで、あっという間に飛び立ち、視界から消えた。

場所は蘭越町名駒。この日はアカハナカミキリやシオカラトンボの飛翔などを撮ろうと思って出かけたのだが、思わぬ副産物に出くわした。いや主産物だったのだ。

自宅に戻り「札幌の昆虫」「北海道のトンボ図鑑」という 2 つの図鑑で名前を調べた。まず体が赤くなるトンボを候補にした。ミヤマアカネ、ナツアカネ、アキアカネ、タイリクアカネ、マユタテアカネ、マイコアカネ、ヒメアカネ、エゾアカネ、ヒメリスアカネ、コノシメトンボ、キトンボの 11 種である。ほかに、ウスバキトンボ、ショウジョウトンボ、タイリクアキアカネ、オナガアカネが「北海道のトンボ図鑑」に載っていたが、飛来・偶産種などの扱いであったので、除外した。

よく知っているアキアカネとナツアカネとは違うので、これらを外す。翅に斑紋があるミヤマアカネ、コノシメトンボ、エゾアカネ、キトンボを外す。マイコアカネ、ヒメアカネは体の大きさが違うので外す。というように絞っていくと、11 種のすべてが該当しなくなってしまった。しかしどれかではあるだろうからと、タイリクアカネと推定した。その根拠は、体長がシオカラトンボと同じくらいだということのみ。

3日に「生きもの情報館」、5日に当ブログ「蘭越発 自然のたより」で紹介した。？をつけて。その直後、千葉県のエミこちゃんさんというブログ読者の方から「ショウジョウトンボでは？」というコメントをいただいたので、もう一度調べてみた。今度は上記 2 種類の図鑑にくわえてインターネット上の図鑑などにも当たった。いろいろな写真を、老いた目を凝らして眺

めた。翅の基部に橙色斑がある、腹部が扁平である、シオカラトンボとほぼ同じ体長などから、これはショウジョウトンボではないかと思った。

しかしショウジョウトンボは北海道には生息しないはずだ。自家撞着に陥った。で、またインターネットで産地について検索した。すると、以前は北海道には生息しなかったが、今では道南の各地で見つかり、近いところでは室蘭でも確認されたという。北上が進んでいるとすれば、蘭越にいても不思議ではない。こうして矛盾は緩和された。

最後は、本当にショウジョウトンボかどうかを専門家に確認することであった。幸い「北海道のトンボ図鑑」の著者の1人で、北海道トンボ研究会の横山透さんと面識があり、撮影した写真を電子メールに添付して送り、同定して頂いたところ、「間違いなくショウジョウトンボ♂です」という返答があった。

蘭越でショウジョウトンボを発見できたことはまことにうれしい。しかし、ショウジョウトンボの北上が、地球温暖化に起因しているとするれば、手放しでは喜ぶわけにはいかない。

えみこちゃんさん、横山さん、ご教示をいただきありがとうございました。

(2009年8月8日)

町内3箇所ではニホンザリガニが絶滅？ 道路工事が影響？

10月1日、蘭越町内の道道を車で走っていると道路工事に

ぶつかりました。看板を見ると「橋をつくっています」と書かれています。数年前にこの付近でニホンザリガニの調査をしたことを思い出しました。

翌 2 日に、地図とカメラを持ってもう一度行ってみました。やはり 2004 年にニホンザリガニの生息を確認したところでした。そこには重機が入っていなかったのですが、ニホンザリガニがいないか調べてみようと思いましたが、立ち入り禁止の立て札があったのでやめました。で、工事の様子を見学し、写真を何枚か撮りました。

帰り道、道沿いにあったプレハブの事務所に立ち寄りました。橋の工事の事務所かな？と思って付近にいた工事関係者の方に聞いてみると、橋とは別の道路工事の事務所でした。

そこで今度は、そちらの様子を見に行きました。大きな道を作っていました。同じく立ち入り禁止だったので、奥には入らず、道路の様子や地図・看板の写真を撮って帰りました。家で地形図と撮ってきた地図を見比べてみました。どうも新設する道路のルートは、2005 年にニホンザリガニの生息を確認した沢の上流部分にあたるようです。

以上二つの工事現場は、どちらもニホンザリガニの生息地に隣接しています。ニホンザリガニの生息環境が悪化して、生息できなくなるのではないかと思いました。すでに生息場所そのものが重機で根こそぎ掘り取られてしまった可能性も考えられました。

そこで週明けの 5 日に小樽土木現業所蘭越出張所（土現）を訪問して、道路係長の川野さんにお会いしました。橋の位置や

道路のルートを聞いたところ、確認した地点のすぐ近くであることがはっきりしました。事前に自然環境についての調査はしていないこともわかりました。ニホンザリガニの生息を再調査したいと要望したところ、事前に連絡をしてほしいといわれました。

6日朝9時、事前に土現に連絡した上で、まず橋の工事現場に行き、ニホンザリガニの生息確認場所を調べました。30分間必死に探しましたが、1尾も見つけることができませんでした。道路工事の方は午後に行きました。この周辺は前回6箇所調査を行い、そのうち2箇所生息を確認しています。今回はそのうち3箇所（生息を確認した2箇所を含む）で調査しました。前回生息を確認した地点はそれぞれ30分間、生息が確認できなかった地点は10分間の時間をかけました。結果は3地点とも0尾でした。

前回の調査で生息を確認した数は、橋の工事現場のほうが10尾（4名で15分間実施）、道路工事現場に隣接する場所で、3尾と2尾（2名で15分間実施）であり、3地点とも他の生息地に比べて生息密度は高いとはいえない状況だったのですが、結果を見て驚きました。たった数年で0尾になったのですから。もちろん、一人でやったわずか30分程度の調査なので、見落としがあるかもしれません。来年以降また調査してみようと思います。

しかし現段階においても、3地点とも絶滅しているか、個体数が減少している可能性があるということはいえると思います。そしてそれに今回の工事が影響していることも考えられま

す。

大規模なダムや林道建設などと比べて、こうした工事は自然環境に与える負荷は少ないかもしれませんが。しかし数多くのこうした工事が累積されたらどうなるか、小さな自然破壊であってもそれを許していけばどうなるか、それは現日本また北海道の自然の惨状を見れば明白です。

当面、土現に以下の点について質問と要望をすることにしました。

工事を計画する段階で、なぜ自然環境の調査をしなかったのですか？

交通量の少ない道路なのに、なぜ拡張・新設するのですか？

今後できるだけ早く周辺のニホンザリガニの生息調査をとして実施してください

工事の実施に当たっては、ニホンザリガニの生息環境に悪影響を及ぼさないようにしてください。

(2009年10月8日)

クマガラの森を守ろう 一 道道の工事にあたって一

私は蘭越町内の○×地区で、2003年から2005年にかけて、絶滅危惧種のクマガラを観察しました。ここ4年ほどは目撃していませんが、営巣していた木が、現在もねぐらとして使用されている可能性があります。

その場所で、間もなく道道の改良・拡張工事が始まろうとし

ています。クマゲラの生息環境の悪化が予測されたので、9日にニホンザリガニの件で小樽土木現業所蘭越出張所を訪れた際に、この点についても道路係長の川野さんに伝えました。で、13日に現場を案内し、工事にあたっては、クマゲラの生息環境に配慮するように要望しました。川野さんは、事前に情報が得られてよかった。来年の営巣時期に調査を実施して、その結果によっては、工事方法などを再検討したいと話されました。

しかし、事前に自然環境についての情報の収集や調査をきちんとせず、計画・着工に至るプロセスは、納得できるものではありません。ニホンザリガニの場合と同様です。幸い自宅からも近い場所なので、ときどき現場に行って、問題があれば率直に指摘して改善を要求したいと思います。

今回は道道の工事ですが、国道や町道の工事でもおそらく同様の問題があるに相違ありません。国や町にも質問と要望書を持っていこうと考えています。

この道道は、崖と川に挟まれた狭い部分に落石や転落の危険があり、周辺住民の生活に欠かせない道路なので、改良・拡張の必要性が高いと思います。ですから工事そのものに反対ではありません。

(2009年10月16日)

**モニタリングサイト 1000 里地調査一般サイト名駒地区 2009
年前期の調査を終えて**

蘭越自然探検隊が、モニタリングサイト里地調査一般サイト名駒地区の「植物相」、「野鳥」、「水環境」の3つの調査活動に参加して2年目になりました。昨年は、調査地や調査ルートを選定、調査方法の研修への参加が主な活動でした。ですから実際に調査を行ったのは今年が初めてです。植物相4回（6月～9月）、鳥類6回（越冬期および繁殖期）、水環境1回（7月）の計11回の調査を実施し、9月末に調査結果を日本自然保護協会に提出しました。このような調査は初めての経験で、戸惑うこともありましたが、充実した時間を持つことができました。今はほっとした気持ちですが、調査ははじまったばかりです。今後も元気で調査を行っていきたいと思っています。5年間は。

以下、いくつか感想などを述べます。

野鳥の調査ルートに除雪がされない部分があり、歩行に難儀をしました。冬の寒風が身に凍みました。夏に調査ルートを決めたため、冬の状況を予測できませんでした。幸いその区間は短かったのですよかったです。

景観タイプに基づいて区間を決める（植物相、野鳥とも）のですが、景観タイプがはっきり分かれる地点を特定できず、かなり恣意的になってしまいました。たとえば、名駒の市街地といっても、大都市の市街地と違って、住宅の密集度は低く、空地や畑などが混在するような状況なので、どこで区切っていいのかよくわかりませんでした。

野鳥の調査では、鳴き声（とくに地鳴き）で種名を判断するのがとても難しく、調査の正確性に自信が持てません。実力不足がはっきりしたので、今後、野鳥の鳴き声を録音したCDな

どで勉強しようと思っっていますが、さてどこまで実行できるかわかりません。

植物相調査は、調査主担当者が植物名には詳しい方だったので、気軽に参加できました。ただ植物は類似種が多く、そのつど図鑑とにらめっこをしたので、かなり時間がかかりました。8月、9月の調査ではそれぞれ4時間を超えました。まだ体力には自信があり、北海道の暑さはさほどでもないのに、厳しいとは感じませんでした。はたして5年後はどうでしょうか？

水環境の調査方法の講習を昨年私が受けてはいたのですが、マニュアルを十分理解できず、一部の調査（水位）を実施できませんでした。また調査地点タイプがすべて4の河川に偏ってしまいました。

全体を通して、調査初年度としてはまずまずだったのではないかと思います。経験不足は回を重ねるごとに解消されていくと楽観視しています。

(2009年10月23日)

道は自然環境保全・生物多様性保全のためにもっと力を入れてください

最近私は、小樽土木現業所(土現)が道路工事を実施する際、事前に周辺の自然環境の調査や情報収集を行っていないことを知りました。調査を会社に依頼すると費用がかかりますが、情報収集のほうは住民や自然保護団体などからの提供を求め

でもただなのはどうしてしないのだろうと思いました。また後志支庁には環境生活課自然環境係という部署があるのに、どうしてそこから情報を得ないのか不思議でした。

そこで私は、先週自然環境係に電話をして、係長の柏崎さんにお聞きしました。内容は以下のとおりです。工事が国定公園のなかで行われる場合には土現から連絡が来る。その場合は、自然環境に影響がないようにという文書を付けて許可をだす。不許可になることはない。それ以外の場所の工事については、連絡はない。また、1ha 以上の大規模な工事の場合は、自然環境係ではなくて、別の部署が対応することになっている。

自然環境係では、生物の調査データの収集は行っていない。北海道環境科学研究センターでは研究のためのデータは集めている。

これでは、たいへん不十分だと思いました。自然環境保全、生物多様性保全のためにもっと金も人も使わなければいけませんね。道は無駄なダムなどの公共事業をやめて、金を回しましょう。

(2009 年 11 月 23 日)

住民による自然再生の取り組みと蘭越町の環境行政について

北海道開発局は、今から 30 年ほど前の昭和 57 年～59 年に、蘭越町淀川地区に広がる丘陵の土を削り取り、尻別川の堤防工事に使用しました。ダンプカー 1 万台分に達する量です。

この付近は約 10 万年前の洞爺湖カルデラ噴火の際の火砕流

が堆積した場所で、地下には黄鉄鉱（パイライト：鉄の硫化鉱物 FeS_2 ）という鉱物が含まれていました。掘り起こされた黄鉄鉱は空気や雨に触れて酸化し、硫酸が発生するようになりました。硫酸は周囲の土を超強酸性に変え、植物が生育できない土地になってしまいました。そして植物のない土地が雨で削られて、地下から新しい黄鉄鉱が顔を出し、それがまた酸化して硫酸を発生するといった悪循環によって、20年以上も植物が生えない状態が続いてきました。

ここに移り住んだ下島亘さんは、植物が育たないこの丘陵を硫酸山と名付け、2004年から自然再生の取り組みを始めました。長期にわたるさまざまな苦労や試行錯誤を経て、自生あるいは植栽した植物を定着させるためには、植物質100%の堆肥をスポット的に置き土するのが有効であることを確かめ、その方法を使って大きな成果をあげました。その結果、地肌がむき出しだった硫酸山に、在来種を中心としたさまざまな植物が生育するようになり、あちこちから野鳥の鳴き声が聞こえ、キタキツネの子育ても行われるなど、多様な生きものの息遣いが感じられるようになりました。また川の水をせき止めて作った小さな湿原（淀川大湿原）には、エゾアカガエルやエゾサンショウウオといった両生類や、トンボやアメンボなどの水生昆虫が見られるようになっています。

下島さんの取り組みが、地域における生物多様性保全の貴重な在り方を示していると考えた私は、その内容を多くの町民の皆さんに知っていただくよう、環境学習会の講師として招いてお話を聞いたり、子どもたちを対象にした自然観察会を実施し

たり、また湿原で見られたトンボを調べ、「淀川大湿原のトンボ」という小図鑑を作って、町民の方たちに差し上げたりしてきました。

こうしたなか、2012年11月には蘭越町主催の環境学習会が行われ、下島さん自身がこれまでの自然再生の取り組みの内容を報告し、私もよみがえった生きもの、とくにトンボについて紹介しました。また町職員で学芸員の山崎友資さんからは、生物多様性保全の意義と外来種問題について包括的に語られました。このような地域の自然や生物多様性をテーマにした町主催の学習会は初めての企画です。町は2年前に学芸員を採用し、箱物行政として批判のあった貝の館というミュージアムの充実や環境学習会の開催、「自然史だより」の発刊などを行い、住民参加の環境行政推進の方向も打ち出しています。今回の環境学習会もその流れの中で開催されたものです。以前の町の姿勢からみれば一定の前進を認めることができます。ただ、学芸員が頑張っているとはいえ、行政組織としては総務課まちづくり推進係が担っているに過ぎず、今後の課題は多々あります。積極的側面は大いに評価しつつ、今後も住民視点で建設的提言をしながら、町の環境行政にかかわっていこうと思っています。

(2013年3月 北海道自然保護協会会誌「北海道の自然」No. 51)

蘭越町のトンボ類

はじめに

蘭越町は、後志管内の南西部に位置し、周囲をニセコ連峰や幌別山地などの山岳に囲まれた盆地にあり、町の中央を道南最

大の河川尻別川が東西にわたり流れ、日本海に注いでいる。総面積約 500 k m²で、気候は比較的温暖であるが、冬は積雪量が多い。蘭越町のトンボ記録は少なく、これまでニセコ連峰の国定公園エリア記録をまとめた 12 種の記録（横山、2011）と筆者のショウジョウトンボの記録がある。

筆者は、これまで蘭越町の鳥類および昆虫など生きもの調査を行ってきたが、トンボにも興味をもち調査を行ない、今回 2006 年から 2010 年まで、主に平野部を中心とした調査で、28 種のトンボを確認した。これで既報の 12 種を含め、蘭越町で記録されたトンボは全部で 30 種となった。そのうち 17 種は今回の初記録である。

発表に際し、北海道トンボ研究会の横山透氏には種々お世話になり、厚く御礼申し上げる。

調査方法

調査地 磯谷郡蘭越町

豊国 旭台にいたる林道から派生した林道で、浅瀬川の溪流や池がある。

名駒 尻別川と目名川の合流点付近。目名川から水を引き入れた水路の流れが止まり池になっている。

淀川 居住する町民が作った人工の湿原と付近の小河川。

蘭越 緑が丘団地奥の林道で、曙川が流れている。

相生 リンリン公園の人工池と付近の小河川。

その他町内各地。

調査期間 2006 年 7 月～2010 年 10 月

調査方法 すべて写真撮影日の記録である。不明な種は、採集し図鑑などで同定した。

トンボ記録 (すべて筆者の撮影記録)

カワトンボ科 Calopterygidae

1 ニホンカワトンボ *Mnais costalis* SELYS

当地の河川に広く生息する普通種。蘭越町初記録。

アオイトトンボ科 Lestidae

2 アオイトトンボ *Lestes sponsa* (HANSEMANN)

当地に広く生息する普通種。

3 オツネトンボ *Sympecma paedisca* (BRAUER)

当地に広く生息する普通種。蘭越町初記録。

イトトンボ科 Coenagrionidae

4 アジアイトトンボ *Ischnura asiatica* (BRAUER)

当地では淀川と名駒でのみ確認。蘭越町初記録。

5 クロイトトンボ *Paracercion calamorum calamorum*
(RIS)

当地では名駒と相生でのみ確認。蘭越町初記録。

6 オゼイトトンボ *Coenagrion terue* (ASAHIN)

当地に広く生息する普通種。蘭越町初記録。

7 エゾイトトンボ *Coenagrion lanceolatum* SELYS

当地に広く生息する普通種。蘭越町初記録。

ムカシトンボ科 Epiophlebiidae

8 ムカシトンボ *Epiophlebia superstes* (SELYS)

当地では蘭越で一度確認したのみ。蘭越町初記録。

ヤンマ科 Aeshnidae

9 ルリボシヤンマ *Aeshna juncea* (LINNAEUS)

当地に広く生息する普通種だが、オオルリボシヤンマより少ない。

10 オオルリボシヤンマ *Aeshna crenata* HAGEN

当地に広く生息する普通種。

サナエトンボ科 Gomphidae

11 モイワサナエ *Davidius moiwanus moiwanus* (OKUMURA)

当地に広く生息する普通種。蘭越町初記録。

12 コサナエ *Trigomphus melampus* (SELYS)

普通種と思われるが、蘭越と相生でのみ確認。蘭越町初記録。

オニヤンマ科 Cordulegastridae

13 オニヤンマ *Anotogaster sieboldii* (SELYS)

当地に広く生息する普通種。蘭越町初記録。

エゾトンボ科 Corduliidae

14 タカネトンボ *Somatochlora uchidai* FOERSTER

蘭越町初記録。

トンボ科 Libellulidae

15 ヨツボシトンボ *Libellula quadrimaculata asahinai*
SCHMIDT

普通種と思われるが、淀川でしか確認していない。蘭越町初記録。

16 シオカラトンボ *Orthetrum albistylum speciosum*
(UHLER)

当地に広く生息する普通種。

17 シオヤトンボ *Orthetrum japonicum japonicum*
(UHLER)

当地に広く生息する普通種。

18 オオシオカラトンボ *Orthetrum melania* (SELYS)

温泉地に近い日出のみで確認。

19 ミヤマアカネ *Sympetrum pedemontanum elatum* (SELYS)
ニセコ連峰の裾野にあるぶどう園で確認。

20 ナツアカネ *Sympetrum darwinianum* (SELYS)

当地に広く生息する普通種だが、個体数は多くないと思われる。蘭越町初記録。

21 アキアカネ *Sympetrum frequens* (SELYS)

当地に広く生息する普通種。最も個体数が多いと思われる。

22 マユタテアカネ *Sympetrum eroticum eroticum*
(SELYS)

当地に広く生息する普通種。蘭越町初記録。

- 23 ヒメリスアカネ *Sympetrum risi yosico* ASAHINA
当地では昆布と蘭越でのみ確認。蘭越町初記録。
- 24 ノシメトンボ *Sympetrum infuscatum* (SELYS)
当地に広く生息する普通種で、アキアカネとともに最も
個体数が多いと思われる。
- 25 コノシメトンボ *Sympetrum baccha matutinum* RIS
当地では、蘭越、名駒、淀川でのみ確認。蘭越町初記録。
- 26 キトンボ *Sympetrum croceolum* (SELYS)
名駒と吉国で確認したのみである。蘭越町初記録。
- 27 ウスバキトンボ *Pantala flavescens* (FABRICIUS)
- 28 ショウジョウトンボ *Crocothemis servilia mariannae*
KIAUTA
2009 年に名駒で確認したのみで、南方からの飛来と思わ
れる。(大表、2010)

まとめ

これまで記録の少なかった蘭越町のトンボ調査の結果をある程度まとめて報告できてうれしく思う。今後も継続して蘭越町並びに後志管内のトンボ調査を行い、微力ながらトンボ相解明の一助となりたい。

文献

- 広瀬良宏・伊藤智・横山透, 2007. 北海道のトンボ図鑑. 183pp.
ミナミヤンマクラブ. 東京.
- 大表章二, 2010. 蘭越町でショウジョウトンボを発見. 北海道

トンボ研究会報、21：18.

横山 透、2011. ニセコ積丹小樽海岸国定公園のトンボ類.
Jezoensis、(37)：75-78.

(2014年3月 北海道トンボ研究会会報 Vol. 24 一部省略して
掲載)

昆虫博士養成講座（初級）

第1回昆虫博士養成講座（初級）「昆虫を採集し、標本をつくろう」が6月21日9時からフィッシュランド名駒で行われました。町の総務課まちづくり推進係の主催で、蘭越自然探検隊は支援・協力という形で参加しました。

はじめに学芸員の山崎さんから、5名の受講生に対して、昆虫採集の意義や注意すべき点などの説明があり、続いてフィッシュランド名駒に隣接するパークゴルフ場や目名川の河川敷に繰り出して採集にあたりました。パークゴルフ場のポール下に窪みがあり、そこにオサムシやゴミムシが多数入りこんでいるのを事前に確認していたので、まずそこで採集。つぎは草の生い茂る河川敷に移動しました。この場所には草原性のコメツキムシやハムシ、カミキリムシなどが植物の葉や茎にみられ、またイトトンボやシジミチョウなども飛んでいました。

2時間近く採集してから、フィッシュランド名駒に戻り、今度は標本作りに取り掛かりました。採集した虫はどれも小さく、足や触角はさらに小さいので、形を整えるのは根気を要するの

ですが、受講生は皆集中して取り組みました。また分厚い図鑑で種名を調べました。さらにツルグレン装置を使って土壤生物を抽出し、顕微鏡観察も行いました。

予定時刻をオーバーする 12 時 30 分まで標本作りを行い、虫をデシケータに入れて終了しました。次回の 7 月 26 日には、乾燥した標本に採集場所、採集日時、採集者を記したラベルをつけて完成させる予定です。

以下は私の感想など。

まず受講生はみなとても熱心で、採集や標本作りに長時間集中して取り組んでいました。

自然に接するよい機会を提供するもので、今後も継続的に行うといいのではないのでしょうか。

はじめ 1 人しか応募がなかったのですが、その後なんとか定員まで増えてちょうどよい人数になりました。全戸に案内を配布するなど周知の方法を改善したらいいのではないのでしょうか。

今回初めて役場の行事に蘭越自然探検隊が支援・協力し、4 名がスタッフとして参加しました。大きな貢献ができたと思います。

採集時期を 7~8 月にして、採集場所も草原+森林にすると、さらに多様な虫が捕獲できます。大きな虫の方が初心者には扱いやすいので、セミやクワガタ、コガネムシなどが多数発生する時期にも行ってはどうでしょうか。

会場の照明が標本作りにはちょっと暗いと思います。

(2014 年 6 月 28 日)

雑文集 蘭越の自然にかかわって

2014年10月5日 発行

著 者 大表 章二

発行者 大表 章二

出 版 らんこし作家デビュープロジェクト

©Shoji Oomote 2014